

企画主旨

東邦大学三病院における呼吸器外科の現状と
新人教育を含めた今後の展望

伊豫田 明

東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野 (大森) 教授

現在、東邦大学三病院の呼吸器外科は肺癌を中心に、悪性中皮腫、重症筋無力症、胸腺腫を含めた縦隔腫瘍、転移性肺腫瘍、気胸などの嚢胞性肺疾患、膿胸などの感染性疾患、外傷、間質性肺炎などびまん性肺疾患に対する胸腔鏡下生検、気道狭窄に対するステント治療など、少ないマンパワーの中で肺移植以外の呼吸器外科対象疾患は全て扱っている。

最新の厚生労働省統計では 2014 年の肺癌罹患数は 11 万人余りと年々増加し、部位別がん死亡率において肺癌は第一位であることから、肺癌の治療環境の整備は喫緊の課題である。特に呼吸器外科専門医数の少なさは大きな問題であり、外科学会会員数約 4 万人のうち日本呼吸器外科学会会員数は約 3000 人、呼吸器外科専門医数は未だ 1492 名 (2018 年 12 月現在) にとどまっている。

東邦大学三病院としても呼吸器外科診療の整備は重要であり、今後、新専門医制度、ロボット手術などの先端医療への対応も必要になってくる。これからの東邦大学における呼吸器外科学発展のためには、呼吸器外科専門医の増加は必須であり、そのためには診療体制の人的充実はもちろん、最新技術の導入、最先端の研究など科としての魅力を広げ、新人教育を含めた展望を見据えて三病院の呼吸器外科が一体となって協力して活動していくことが重要である。

そのような前提の中で、今回、平成 30 年 6 月 15 日第 152 回東邦医学会例会を当番教室として当科が主催させて頂くにあたり、三病院呼吸器外科の交流を現行よりもさらに積極的に行い、お互いの現状を把握して、今後足りない部分を補完しあえるような状況を作り始めるのが重要な第一歩となると考え、当番教室企画として、大橋病院、佐倉病院、そして当院呼吸器外科の現状を今後の展望を含めて御報告頂いた。これまでの交流会と違って、東邦医学会という公式の学会の場で、このような企画は今回おそらく初めてであろうという教室員の意見であり、学会後の懇親会を通じて活発な意見交換があったことをこの場をお借りしてご報告する。

各病院の呼吸器外科の現状と問題点を共有し、それぞれが足りない部分を補完しあいながら、各科の長所を伸ばし問題点を改善していく努力をすることによって、少しずつではあるが新しい展望が開けていくのではないかと思っている。未だ数少ない呼吸器外科医を大切にす東邦大学として、本企画が、東邦大学における呼吸器外科の将来像を考える良いきっかけとなれば幸いである。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2018-057